
金色の星

天泣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金色の星

【Nコード】

N5911Z

【作者名】

天泣

【あらすじ】

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になって、九尾とも和解して・・・忍に恋愛に一生懸命なお話を目指しています。

基本は公式のストーリーを守っていますが、綱手様登場あたりから完全にオリジナルです。

そのためオリジナルキャラもたくさん登場します。

（九尾も公式とはキャラが違います。火の国大名家なども登場しています）

あと、四代目火影が存命しています。

あんまり人が死にません。

平和主義なイタナルコの世界、よろしければごらんになってください。

（「金星」管理人ゴッホ のサイトで掲載していたものを訂正加筆してこちらにまとめています）

設定

設定

ざっとした概要としては・・・

ナルトが戸籍上女の子で、イタチと恋仲になり、基本は公式のストーリーを辿るものの、綱手登場あたりから完全パラレルオリジナルな内容のお話です。

以下、箇条書。

- ・ナルトが戸籍上女の子です。
- ・ナルトは四代目の子供です。
- ・ちなみに四代目は生きています。
- ・ナルトは四代目の愛のスパルタのお陰で、下忍現在暗部に顔を出すほどの実力者です。（かといってスレナルではない・・・）
- ・普段は四代目考案の左手の呪印で九尾のチャクラを二重に封印していて、その呪印のせいであまくチャクラを練れないので、ドジでウストラトンカチです。
- ・小さい頃から駄目なオトナの四代目に代わって主婦じみた事をやっていたので家事は完璧です。もちラーメンは大好物ですが・・・

- ・イタチさんは一族を滅ぼしても里抜けしてもいません。
- ・ただ九尾の一件でうちは一族はイタチとサスケ兄弟のみが生き残

っている状態で、今はサスケと2人暮らしです。

・イタチさんは現在暗部配属です。下忍の監督上忍になったカカシに代わり、四代目の護衛任務多し。

・カカシ先生は四代目の弟子です。

・しいていうなら、3代目 自来也のじじい 四代目 カカシ ナルトみたいな師弟関係です。

・ちなみにナルト総受け（えっちい意味ではなく、みんなナルトが大好きって意味）

・なにがなんでもイタナルコ。

・年齢差5つの恋愛で頑張りたいと思います。

切に望む（前書き）

うずまき家の朝。ナルト12歳頃。

切に望む

切に望む

少し古びた家々や、人間などやすやすと踏みつづし、ひと飲みにしてしまうほど巨な獣たちの棲む森の向こう、遠く東からこぼれんばかりの光を纏って、強い白光の太陽が昇ってくる。
その輪郭からあふれる橙が、木の葉の里のシンボルのな火影岩に濃い影を作って、黄色と黒のコントラストが美しく目に映る。

・・・などのんびり窓の外を眺める暇もなく、忍の朝は始まる。
里長である火影の家ともなると尚更である。

ボタン！、と勢いよくドアを開けたのは、金色に輝く髪をツインテールにした少女。

両頬には細い筆でひいたような痣が3本ずつ。
華奢な身体をオレンジの忍衣で包み、仁王立ちする彼女の瞳は晴天のように澄んだ青。

「おとうさん、朝だよー」

一応最初は控え目に小声で言ってみる。

目の前ですやすやと寝息を立て、ベッドに潜り込んでいる父の表情には連日にわたる仕事による疲れがありありと浮かんでいる。
初めから大声で起こすのは酷だ。

「おとうさん!!」

ゆさゆさと布団から覗く、男にしては細い肩を揺するが、返ってくるのは「うーん」といううめき声だけ。

その反応に彼女は眉間に皺を寄せた。

毎朝の事ながら、父の寝起きの悪さには舌を巻いてしまう。

早くしないと、火加減に注意して焼いた半熟の目玉焼きが冷めて硬くなってしまう。

なにより早く朝食を済ませてくれないと後かたづけもできないし、洗濯だってまだ残っている。

「仕方がない」

彼女は腹に力を込めると、えい!と布団を思いつきりひっぱった。

「・・・っどわああっ・・・!!」

ひっぱった布団と一緒に父がベットから転げ落ちてそんな声を上げるが、いつもの事なので気にしない。

「あいたたた・・・ひっどいなあーこれが娘のする事かなあ・・・」

「やかましい！」

わざとらしく腕をさするので睨むと、相手はにへらへらと笑んだ。

「あはーごめん。起こしてくれてありがとう。おはよう、ナルト」

ナルトはそこで初めて頬をゆるめて、満面の笑みで応えた。

12年前、突如として木の葉の里を天災が襲った。

九尾の妖狐の原因不明の襲来。

里はよもや壊滅とまでに追い込まれた。

それを阻止したのは、木の葉の里を治める四代目・火影であった。禁術を発動し、生まれたばかりの自分の子に九尾を封印した。

その際の禁術のために彼の妻であり、九尾を宿した子の母は命を落とした。

九尾の破壊的なチャクラの気配は消え去り、里には平穏が戻った。だが、人々の深い悲しみは強い憎しみに変わり、彼らの心に残された。

日に日にそれは増してゆき、抑えられなくなった。

そして、はき出した。

虐待や蔑みとして。

妖狐を宿した子に。

それはとても悲惨なものだった。

何か騒ぎがあったと思って探し出し、見つけたその身体はいつも傷

だらけで、痛々しい痣が目を覆いたくなるほどだった。

それに反し、子の父、四代目への対偶　は、まさに天と地の差があった。

里の人々は過大なまでに四代目を崇高し、それこそ神のように扱った。そのギャップに、四代目は父親としても、火影としても黙っていられなくなった。

本当の英雄が誰なのか何故わからない？
本当に辛いのは誰なのか何故気づけない？

恐怖心からそのような行動に出るのはわかる。

だが、もしもだ。

もしも天災を赤子ではなく自分の身に封じていたら、里人たちは自分にも同じ行動に出ただろうか・・・？

自分に封じる事は可能だった。

もともとそのつもりだった。

だが、妻が自分たちの子を抱いて 言っただ。

「木の葉の里は、火影であるあなたを失うわけにはいかない。私があなたの代わりになります」

お産後のためにひどく青白い顔で言っただ。

今思えば出血で立ち上がる事もままならないはずなのに、彼女は赤子を抱いて、九尾と対峙した自分を追ってきたのだ。

そんな彼女の瞳は とても強く、彼女の言葉を裏切る事ができなかった。

だが、お産後で気力、体力共に限界ぎりぎりであった妻の身に、脅威的な九尾を封じる事は不可能だった。

彼女の身体が耐えきれず、術の発動中に壊れ、九尾のチャクラが溢れ出せば、自分も、赤子も、里もひとたまりもない。

絶望的なことに、現役を退いた三代目火影はちょうど遠方に任務に出かけていて里にはいない。

自分しか、里を守る者はいないのだ。

四代目は妻の抱く赤子に目を向けた。

生きている事をその声で表しているかのように激しく泣く娘に、四代目は覚悟を決めた。

それを聞いた妻は微かに眉を顰めたが、刹那こぼれんばかりに微笑んだ。

母親のとてもあたたかい笑みだった。

「私とあなたの子ですもの。きっと・・・いえ、必ず立派に制してくれる」

科学的には言い表せない、生まれたばかりという事と、妻の言葉に四代目は動いた。

妻の身体に印を結び、娘に九尾を封印した。

今思えば、妻の身体で術を発動したにしても、何故迷わず自分の身に封じなかったのか、ただただ後悔するばかり。

何にしても、もう手遅れなのだ。

自分の後悔も。

我が子の運命も。

里の人々のふるまいも。

火影からの悲鳴じみた警告に、里の人々の暴行はぴたりと止んだ。ひとまずこれで事態の悪化は防げる。そう安堵したのもつかの間だった。

しばらくすると、里の人々は、子供を完全に無視しだしたのだ。決して声をかけることも、触れる事もしないで、ただその目に冷たい憎しみと怒りを込めて見つめる。

存在そのものの拒絶は、子供に絶大な孤独感を与えた。

身体に受けた傷は、九尾のチャクラも手伝っていつかは消えてしまっが、心に受ける傷は蓄積されるばかりで、完全に癒せはしない。

存在を拒否された子供は、いつしか心から笑うことも、泣くこともできなくなってしまった。

父がそのことを哀れみ、自分の非力さを嘆き、涙を堪えて、「すまない」と謝罪して抱きしめたことは何度だろう。

その度に、その子は言うのだ。

「私は大丈夫だよ」と。

私には、父さんやじっちゃんがいるし、里の人の中には私に優しくしてくれる人もいる。

だから 全然だいじょうだよ、と。

子供にはない色をその目に浮かべて笑うのだ。

小さな小さな手で自分 を抱きしめ返してくれるのだ。

この子は自分を恨んでいない。

里の人々を恨んでいない。

父としても驚くほどに、娘はまっすぐ素直に、誰よりも優しい子に育った。

お人好しだと言われたらそうだろう。

馬鹿だと言われたらそうだろう。

だが、それだからこそ、父は子を愛していた。

ナルトは今年で12歳になった。

苦悩の末にアカデミーを卒業し、下忍になった。

下忍になって 数週間。

以前は自分が結っていた髪も、今では自分で結えるまでに女の子らしくもなってきた。

また、小さい頃から自然と家事をこなしていたせいか、料理の腕はピカイチだ。

朝食に並ぶみ そ汁からは、かつおぶしの良い匂いがしている。

にへら、と四代目は目尻を下げた。

「俺って子育ての天才かもね〜ん」

「あーもう・無駄口たたいてる暇あったら早く食べてよ。今日は集合時間早いんだから」

自分に反して時間に厳しいナルトの鋭い声に、だがしかし四代目は食い下がる。

「どうせカシくんが遅刻してくるんだから一緒でしょ？」

「ったく。先生がそんなだから生徒に遅刻くせがついたんだってば！毎度サクラちゃんにあた られる私の気も考えてほしいってばよ」

本当に腹を立てているのだろう。

塩鮭をおかずに白飯をかき込むように食べて、挙げ句にずーつと音を立ててみそ汁を飲み干している。

女らしくなったというのは訂正・・・やはり女手がないせいか、少々下品に育ってしまった。

男らしいといえはしつくりくるほどに。

どうしたもんかと お茶をすすって考えてみるが、そこは天下の四代目。

何か浮かぶわけもなく、「お弁当だって ば」と渡された渦巻き印の弁当箱に、またひへらつと笑って弁当箱を受け取る。

単に親馬鹿なのだ。

再びお茶をすすりながら、ふと四代目は後かたづけを始めているナルトを見つめた。

「ねえナルト」

「ん、何？」

流れる水の音と、カチャカチャと陶器のあたる音がする。

視線は、袖をまくりあげているために露わになったナルトの左手首に固定される。

そこには、手首をぐるりと一回り、入れ墨のようにして読みにくい画数の多い漢字が並んでいる。

「実力・・・いつまで隠してる予定？」

一瞬、カチャと音が止まった。

水の音だけが空気を震わせた。

かさり、と窓際の観葉植物の葉が風に揺れた、ほんの少し後で、ナルトの少し高い声がした。

「まだ、ちゃんと制御できないから、もうしばらくつけてるってば」「そうは言うけど・・・暗部の任務でドジった事ないでしょ？Sラックでちゃんと九尾のチャクラの制御できてるんだから、普段わざわざ呪印でチャクラ抑圧する必要ないじゃない」

四代目の言葉通り、実はナルト、実力は下忍レベルじゃなく、暗部の任務をこなせるほどのレベルだったりする。

ナルトの左手首の呪印は、チャクラの流量をあえて止め、チャクラを練りにくくするもので、己に宿る九尾を危惧してナルトが四代

目に頼んで施してもらったものだっただ。

その呪印は特定の解除法を知っている者にか解けないもので、呪印を施した四代目と、ナルト しか解除法を知らない。

ナルトは暗部の任務の時にだけ呪印を解き、本来の力で戦いに臨む。

状況にあわせて解くか否かを判断しているのだ。

「いやーまー・・・それはそうだけど・・・もしもって事があるじゃん？保険かけとくのに越したことないってばよ」

キュと蛇口を閉めて振り返った彼女は、気持ちの良いほどのからりとした笑顔だった。

自分と 同じ色彩でも印象の違う、金の髪と、碧い瞳の少女の笑顔は、太陽のように目映い。

（この子が一番九尾を恐れている）

否、人を傷つける事を恐れている。

四代目は秀麗な眉を顰めた。

ちりりと心が痛む。

身支度をして、忍具やら弁当やらの入ったリュックを背負ったその背中、どこか逞しく、どこか寂しげで・・・だから四代目は

微笑んだ。

「いってきますっばー!」

「うん、いってらっしゃい」

スリーマンセル制のおかげで生まれて初めて友達と呼べる人が出来たようで、毎日楽しそうだから、だからいつか・・

(いつか・・心から笑える日がくるよね・・)

迷惑ばかりかける自分を愛してくれてありがとう。

ボタン・・と玄関のドアが閉まる音がした。

今日もつずまき家の一日が始まる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5911z/>

金色の星

2011年12月20日20時48分発行